
Call of Duty Modern Warfare2,5 「Japan」

KAME

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Call of Duty Modern Warfare 2,
5 「Japan」

【Nコード】

N0800Y

【作者名】

KAME

【あらすじ】

ゲーム「Call of Duty Modern Warfare 2」での、日本側の物語です。

アメリカに続き、突如侵略された日本人々の戦いを描いていきます。

プロローグ

0 日目

・ 変わらぬ日常

朝起きて、母さんの作ってくれた朝ご飯を食べながらテレビを見る。ただ、その日違ったのは

『米、武装組織による攻撃を受ける！！空港テロへの報復か！？』
という、地球の裏側についての特集が放送されていたくらいだった。

「大丈夫かしらね」

「大丈夫だろ、あの国は強いんだから」

「やっぱり沖縄からも撤退するのかしら」

などと、両親が少し不安そうなことを口にしていてのを後にし、自分はいつものように学校へと向かうのであった。

・ 「米、武装組織による攻撃を受ける！！空港テロへの報復か！？」
このニュースは同僚達の話題的であった。

当然である、自分達がいる国がいるのもアメリカ、彼らの軍事力のおかげでもあるからである。

自分たち自衛隊の装備は確かに敵と戦うには十分である、しかし、「守る」となると米軍による後ろ盾が必要だ。

しかし、今そのアメリカが攻撃を受けている、後ろ盾がない今の日本はまさに格好の的である。

「日本はさすがに攻められないだろ」

誰もがそう信じたいと思っていた。

1日目(前書き)

やっぱり自分には語彙力がないと痛感します(涙)

1 日目

海上保安第11管区

巡視船『りゅうきゅう』搭乗員 「松崎圭介」

警報が鳴る、レーダーに不審船を捕捉したとの情報である。

アメリカが攻撃を受けてからというもの、不審船の出没する頻度
がかなり増えた。

空も同じく、北からのロシア機は少しは減ったものの、代わりに
西からの中国機はその分やってくる、それも以前よりも接近してく
るのである。

自分は、海の担当だからよくわからないが今やるべきことは、不審
船を拿捕し法に則って裁くことだ。

「こちらは海上保安巡視船『りゅうきゅう』直ちに活動を停止し、
本船の指示に従うべし」

現場に到着し不審船を拿捕するべく、まずは停止指示を試みたの
だが一向に活動を止める気配はなかつた。これ5分が過ぎようとして
いる。

どうやら不審船は漁をしているらしかった、当然無許可で。

アナウンスの意味がないと分かった艦長は、機関砲を不審船へ向け
る許可を出す。

問題はここからであった、
指示通りに射手は機関砲を不審船に向け、当然撃つことは許され
ない。

しかし、不審船はいつこくに密漁を止めようとはしない、それどこ
ろか何度も体当たりをするような素振りまで見せてくるではないか。
威嚇射撃の指示が出る。

射手は不審船にあたらないように威嚇を開始する。

すると、不審船は速度を下げ始めたではないか。

スクープを撮れるではないかと期待して、ビデオカメラを構えていたもののどうやら「平和的に」終わるかと思われたそのとき、

「不審船甲板上に動きあり・・・対戦車ミサイルだ！」
動小銃にそれから・・・

アナウンスが悲鳴に近い声を上げる、と同時に不審船の甲板がちがちか光り始めた。

巡視船には小さな穴が次々と開いてゆく

艦長からの発砲許可が下り、射手が引き金を引く。

サーマルビジョンを使っているため、熱源反応である相手の乗組員は丸見えだ。

機関砲から発射された大口径の弾丸は相手の船に着弾、つぎつぎと風穴を開通していく。

すると、不審船の甲板から対戦車ミサイルが発射される。

発射されたミサイルは吸い込まれるかのように機関砲へ飛んでゆき、そして爆音が響いた。

「機関砲被弾！繰り返し、機関砲に被弾！！発砲不可！」

その瞬間こちらの武器が失われた、相手は一向に撃つのを止めないこちらはほぼ丸腰に近い状態になってしまい、抵抗できないまま撃たれている状態だ。

不審船は突如スピードを出し始めて海の彼方へと去っていく。

そう、西の方角へ。

ぼろぼろになった『りゅうきゆう』は、東の方角へと進んでゆく。

幸いなことに、けが人はいなかった。

不審船と遭遇し、たった17分の出来事であった。

・・・9時間後

日本 埼玉県 公立高校2学年生 「津田 吉弘」

今日は待ちに待った日曜日！

普段から寝不足である自分にとっては貴重な休養日である。

明日は修学旅行があるが、もう既に準備は整えている！

さあ！今日はどっぶり寝るぞ！！

と言いたいところだが、案の定親が叩き起こしに来る、勘弁してくれ。

当然、頭が働かない状態で朝食を食べる。

テレビからは相変わらず耳障りなCMが流れている、どうしてこんなにやかましい子どもがテレビに出演しているのかと、疑問に思っているとか何かの特集番組が始まった。

『尖閣諸島沖で海上保安が不審船により攻撃を受ける！』
という題名でため息が出る。

「またどうせ中国なんじゃないのか」

「なんだか物騒な世の中ね」

「ほら見る見る！酷いやられ様だぞ」

などと、両親の会話を聞きながらも再度テレビ画面を見ると、攻撃を受けたらしい大きな船が映っていた。

・・・まさに、蜂の巣であった、船には一面銃弾の跡が残っており、機関砲は原型を留めてはいなかった。

「ひよつとしたら、戦争が起きたりしてね」

「バカ言え、仮に起きてても小競り合い程度だ。第一、今戦争が起きても誰も得しないに決まってるだろ」

と、父に軽くあしらわれムツとする。

そのときは冗談で言ったつもりだった。

部活もないのでその日は友人と遊び、バカをやって平和に過ごしたのであった。

そう、いつもと変わらぬ単純な1日であった。

ああ、彼女が欲しい！

1日目（後書き）

感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしい部分があればご指摘お願いします。

2日目

「こちらセキュリティ、そちらのネットワークにウイルスを検出した。なにか異常はありませんか。どうぞ」

「こちら本部。現在スキャンングを実施中、少し待ってください・・・結果が出た、何も異常はない。なにかの誤作動では？」

「そんなはずは・・・他の部署にも確認してもらいます。――」

『おい、松浦、そっちはどうだ？』 『こっちも反応が出ているぞ』

『わかった、大宮は？』 『ばつちり反応してる！』 『――本部、こちらセキュリティ、再度スキャンをしてm』

「どうした・・・セキュリティ応答せよ。セキュリティ・・・」

！？何だこれは！誰か来てくれ！！ネットワークがダウンした！！」

2日目 『Beginning』

公立高校学生 「津田 吉弘」

日本 京都市行き新幹線 京都までは残り34km

「いえーい！引つかかったー！！」

「だからババ抜きは嫌いなんだよ」

「それにしてもタッチ弱いな」

状況を説明しよう。

自分はいまクラスメイトと共に新幹線の中でトランプをして修学旅行を満喫しているところであり、ババ抜きが異常なほど弱いタッチこと龍也が悲鳴を上げているところだ。

「さあさあ、泣いている暇はありませんよ！第二ラウンドをとと！」

「！」

突然列車が止まったのである。

一緒に乗っているみんなも何がなんだか分からない状態だ。

先生が誰も怪我をしていないかを確認している。

すると、アナウンスが鳴り

「お客様には大変ご迷惑をおかけしております、ご都合により本車両はここで待機をしております。繰り返し申し上げます、本車両は「クラスから残念がる声が一斉にあがる。」

それも当然だ、残り十数分もしないうちに待ちに待った京都に着くというのに、まさかの待機なのだ。

だが、トランプをしている自分たちに死角はなかったのである。

「じゃあ、続きを」

「おい！見るよ！F-15飛んでいるぜ！！」

窓から空を見上げてみると、確かに戦闘機が数機飛んでゆくではないか、それも京都の方へ。

「お前興奮し過ぎだろ！とりあえず気を取り直して大富豪を」

「おい・・・空戦していないか、今」

じっと見ていると、京都の方から今度は別の戦闘機が数機やって来たと思うと、突然向きを変えてミサイルを撃っているではないか。

そして、ミサイルは京都の方へと向かっている戦闘機の一機に当たった・・・

誰もが取り付かれたかのように見ていると、撃ち落とされた戦闘機の破片がこつちへ落ちてきてすぐ目の前の線路へと轟音を立てながら降り注いだのである。

そして、もうどっちだか分からないが戦闘機がまた一機撃ち落とされて、再び破片がこちらへと向かっているではないか！

本能は「逃げる！」とせかしてくるが、まるで棒にでもなったかのように全く動かない。

そうこうしているうちに破片は隣の車両へと降り注いでいく。

悲鳴と轟音が聞こえてくる。

そして、その隣の車両から人が逃げ込んでくる。

何人かは血を流していた。

悲鳴が聞こえる、クラスの声もあれば逃げてくる乗客の声もある。

そして、再びアナウンスが鳴り

「乗客の皆様にお知らせします！車掌および運転手との話し合いの結果、皆様を避難させることにいたしました。皆様は速やかに本車両から」

言われなくても分かっていた。

外に出るのは危険だが、こうしていてもラチがあかない！

みんな車両から降りていく・・・

「なあ、ヨツシー、これ夢じゃないよな」

タッチが震える声で聞いてくる

「当たり前だろ・・・これが夢ならお前がババで負けているのがおかしいだろ」

「そうだよな・・・」

体からアドレナリンが分泌され、妙な感じがした。

夢であつて欲しい。

列車から降りながらそう思い続けた。

2日目(後書き)

感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしい部分があればご指摘お願いします。

3日目

3日目

日本 陸上自衛隊 第二普通科連隊 一等陸士

「佐藤 智久」

「こちら第七地区、誰かアルファ4へ増援を」

「第3地区に敵の落下傘部隊が押し寄せている！」

「敵の装甲車と遭遇、至急航空支援を」

無線からはこれから自分たちが到着する予定である現場の状況が聞こえてくる。

車内にいる仲間達も顔が強ばっている。

自分達、第二普通科連隊は突如現れた敵の排除のために金沢市へと急行している。

敵は大規模な部隊であり、装甲車から攻撃へり、さらには戦闘機と輸送機からの落下傘部隊までもが攻撃を開始しているというのだ。

「弾薬装填！」

分隊長「穴戸 森弥」が弾薬装填の指示を出し、全員がボルトを引いて弾薬を装填する。

本当に実戦が始まるのだ。

そう、だれもが緊張して思っている。

自分もまさか急に実戦を経験するとは思ひもしなかった。

あまりに急すぎるため家族への電話はもちろん、遺書を書く暇さえもなかった。

それは自分だけではなく他の隊員も同じことだが、それでもせめて両親への電話だけが心残りだ。

銃声が聞こえ始め、緊張感がさらに高まっていく。

すると急に視界が明るくなったかと思うと、一瞬気を失ってしまった。

気が付くと味方の隊員が安全な場所まで自分を担いでくれていた。

「佐藤、どこか怪我はしていないか」

「大丈夫だ、それよりも何が？」

かすれる声でそう答える。

「敵の戦闘機だ、まあ、見ての通り俺たちはまだ生きている。トラックはお陀仏だけだな。」

味方の指差す方向の遠くにはさっきまで自分たちの乗っていたトラックが横転し、煙を吐いている。

そしてそのトラックの近くには大きな穴、否小さなクレーターができています。

「こちらニキータ、敵の戦闘機による空爆を受け移動手段を失った。これより徒歩で移動するため予定時間よりも遅れる。オーバー」

「こちらブラボー了解、できるだけ早く来てくれ！」

「了解、辛抱してくれ。アウト」

無線を使用していた隊長が、こちらを見て、状況を説明する。

「自分たちはいま見ての通り移動手段を失った。増援を必要としている市内の部隊と合流する必要があるが、わかっていると思うが歩いていくしかない。各自警戒して移動するように。いいな」

と、言い終わるや否や、近くの木に何か当たる音がした。

当たったのはそう、銃弾だ。

銃弾の飛んできた方向を見ると、自動小銃を手にし自衛隊とは違う迷彩服を身にまとった6、7人の集団が見えた。

「隠れろ！姿勢を低く！！」

隊長が大声を出し、応戦する。

それに続くかのように他の隊員達も敵に狙いをつけ、89式小銃を撃っている。

「200メートルの道は酷く険しくなる。」

そう、本能が告げていた。

3日目（後書き）

感想お待ちしております

誤字脱字、おかしい部分などがあればご指摘お願いします。

3日目 part 2

「再装填、援護を！」

「了解」

撃つても撃つても当たらない。

当然と言えば当然なのだが、敵は弾には当たってくれない。

戦場で映画に出てくる敵のように体を曝け出すのはまさに自殺行為に等しいからだ。

「敵はLMGを持っています！」

「このままじゃ日が暮れるぞ」

「佐藤、杉永、山田。回り込んであのLMGをだまらせる！今から援護するから全力で走れ！いいな」

隊長の秒読みが終わると共に味方は一斉に弾幕を張り、それに合わせて指名された隊員達は全力で走る。

敵からの攻撃の手は弱まったが、それでも走っている自分たちを狙っているらしく、すぐ隣の木や足下が弾け体内からアドレナリンが分泌されているのが分かる。

何も考えずにとにかくできるだけ速く走った、だが敵から見えない場所に着くまでかなり長く感じた。

息を切らせていると、他の二人も追いついてくる。

「撃たれたか」

「いや、山田お前は」

「大丈夫だ、まったく生きた心地がしないぞ・・・」
と、互いに無事なことを確認している。

「何をもちもたしている！？早くやつを黙らせる！」
と無線から隊長の怒鳴り声が聞こえてくる。

かなりの銃弾が飛んできていらしく、弾が風を切る音が無線からも聞こえてくる。

「了解、これより敵の制圧に掛かる、移動している間は敵の注意を

引きつけておいてください」

「もう十分すぎるほど注目されている！！」

「よし、急ごう」

距離は音からすると大体50メートルほどらしい、常に銃声が聞こえている。

素早く、そして慎重に行動をしていると先頭の山田一等陸士が「止まれ」と合図をする。

何かを見つけたらしく指差す方向を見ると、いた。

敵だ

どうやらこちらにはまだ気づいていないらしく、警戒しながらもこちらに近づいてくる。

「同時に撃つぞ、いいな。俺は右のやつを、佐藤は真ん中のやつをやってくれ」

「おれは左でいいんだな」

「そうだ」

3、2、1・・・撃て！

それぞれが狙いを定め、引き金を引く。

すると敵は崩れるように倒れる。

「・・・行くぞ」

死体のそばを通り過ぎたとき、つい死体を見てしまう。

重装備でSF映画に出てくるロボットのような外見をしているが、顔を見ると人種は違えども自分と同じ人間だ。

目は見開かれており、弾が当たった頭からは淡々と血が流れていた。殺したんだ

初めて人を殺したんだ

彼には家族がいたかもしれない、子供もいたかもしれない。

自分はたつた今、自分と同じ人間の人生を終わらせて

「おい、佐藤。いちいち撃った敵のことは気にするな。この先何十人も殺していくかもしれない、こいつらだってあのまま見つけていたら俺たちを殺す気だったんだ。考えるのは隊長達を助けてからに

しろ。いいな」

「……わかった」

とにかく、考えるのはやめることにしよう。

歩くこと数分、LMGを撃っている敵が見える位置に到着。

さっきと同じように、敵を排除する。

「隊長、やりました。クリアです」

「いいぞ、よくやった。こっちで合流だ。」

数分で3人の生涯が終わってしまった。

そう、自分の手によって。

「目的地まであと少しだ。行くぞ」

隊長の後に付いていくと、市内に入り激しい銃声のする方向へと向かう。

全員が神経を張り巡らせていた。

建物の窓、屋上、路上、すべてに

空を見上げると数えきれないほどのパラッシュシュートが町に降り注いでおり、中には空挺戦車まで見えた。

到着したのは大通りであった。

そこには味方がおり、既に銃撃戦を始めていた。

「こちら二キータ部隊です！状況は」

「今、市民の避難が完了するまでの間ここで敵を食い止めているが、敵の空挺部隊が町中に降り注いでいて、対処しきれていない。貴様の部隊は左翼の防衛に当たってくれ。」

「了解です、聞いたな。行くぞ！」

移動している間は姿勢を低くしていた、下手に頭を上げると流れ弾に当たりかねない。

左翼の建物は悲惨であった。

そこら中に血があり、赤くなつたガーゼがそこら中に転がっていた。
「増援だ、今の状況は」

「今はなんとか食い止めているが敵の攻撃が激しい、負傷者も多数出ている。あそこのネットカフェを拠点にして敵を食い止めてくれ。あそこからなら見晴らしがいいから、敵を食い止められる！」

ネットカフェというのは今いる建物の向かい側の建物であつた、確かにあそこの2階なら道路が見張らせそつだ。

「了解、あそこまで走るぞ！」

建物の裏口から出て、比較的安全な方の道路を全力で8人（このうち3人はさつきまでいた建物から付いて来たやつらだ）が「ネットカフェ」へと走る。

周りの地面は静かだ。

ネットカフェへと到着し、いざ入ろうとすると隊長は自分たちを止まらせる。

店内へと意識を集中すると人の気配がする。

「こちらにニキータ、チャリーどうぞ」

「こちらチャリー」

「ネットカフェに人は派遣しているのか」

「いいや、あそこには誰もいないはずだ」

「了解、敵と思われる集団を発見した。これより確認する。佐藤、

先頭を頼む」

「・・・了解」

慎重にドアを開ける。

隙間からは誰もいないらしい。

そう思いドアを開けると目の前にナイフが見えた。

反射的に身を屈めて避け、ナイフを持ってしている腕と手を掴みそのまま壁に叩き付ける。

ナイフを持つ手を壁に打ち付けて、落とさせそのまま床にはり倒し、即座にピストルを抜き相手に銃口を向ける。

引き金に指をかけた瞬間、目に映つたのは「一般人」であつた。

「ううう撃たないでえええ!!頼むううううー!!」

「こんなところで何をしているんですか」

「友達とここにいたらいきなり爆発が起きて、それで・・・」

「ここに残った、と」

持っていたのはナイフではなく包丁だった、民間人だと気づくのが遅れたら・・・

「怪我はないか佐藤」

「大丈夫だ、それよりも民間人を・・・他に誰かいますか?」

「店員は何人かの客は逃げていったけれども、4人います」

「分かりました。」

「山田と杉永は民間人の保護を、残りは敵の迎撃。いくぞ」

窓に付いて早速道路を見ると、敵がいた

それもすぐ下であった。

「敵発見!すぐ下です!!」

「撃て!撃て!中に入るな!!」

瞬く間に耳をつんざくほどの銃撃戦が始まったのである。

3日目part2(後書き)

ご感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしい部分などがあればご指摘お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0800y/>

Call of Duty Modern Warfare2,5 「Japan」

2011年11月5日02時21分発行